

心理学講座

服従と攻撃性

初回の特集は「攻撃性」を選びました。日常の人間関係のなかで私達も実に理不尽な攻撃を被ることがあります。納得が行っても簡単に許すことはできませんが、メカニズムがわかれば対処の仕方に役立てると思われます。今回は組織と個人の関係から見ていきたいと思います。

1. 攻撃性は本性か学習性か

攻撃的な人といえば乱暴な人をイメージしてしまいがちですが、「世界最大の悪は、平凡な人間が行う悪である」と発言して物議を醸した人がいました。ハンナ・アーレントというユダヤ系の哲学者・思想家です。映画にもなって話題になりました。

彼女はナチスの親衛隊としてたくさんのユダヤ人を強制収容所へ送ったアイヒマンの裁判を傍聴することになりました。ところがアイヒマンは「紋切り型の決まり文句や官僚用語をくりかえし」「誰か他の人の立場に立って考える能力の不足した」(矢野久美子、NHKのサイト)ただの思慮の浅い役人に彼女の目には映りました。しかし雑誌に傍聴記を書いたアーレントには「大量殺戮が凡庸なものだったというのか、ナチの犯罪を軽視し、アイヒマンを擁護するののか」といった非難の嵐が浴びせられました。

2. アドルフ・アイヒマンとは

アーレントの指摘を考えるために、まずアイヒマンについてご紹介したいと思います。以下はwikipediaからの引用です。

アイヒマンは電機会社の簿記係をしていた父を持つ中産階級の子供に生まれました。子ども時代のアイヒマンはやや暗い顔色をしていて「ユダヤ人」と馬鹿にされていました。(反ユダヤ主義は日常的だったようです。) またアイヒマンは学校の成績があまりよくなくて中途退学した後、父の経営する会社も半年で辞め、販売員として働いていた会社も解雇されてしまいました。残虐行為の背景に彼のコンプレックスがあったことを指摘する人もいます。

父の知り合いの薦めでオーストリア・ナチス党に入党していた彼は失業を契機として軍人としての活動を始めます。しかし余りに単調な軍事訓練に嫌気がさし、人員募集していた親衛隊に飛びつくように入隊しました。

数ヶ月後アイヒマンはユダヤ人をパレスチナに移送する計画に携わるようになり、ここでの「活躍」が認められて、第二次世界大戦が始まると各地のユダヤ人移住局を統括する立場となりました。

1940年6月フランスがドイツに降伏し、ドイツの支配領域が広がると、ドイツの抱えるユダヤ人の数は325万人にも増えて、彼らの追放先を探すことがドイツ政府にとって急務となりました。1941年8月から9月頃、総統アドルフ・ヒトラーがヨーロッパのユダヤ人すべてを絶滅するよう命令を下しました。

アイヒマンは強制収容所でガス殺させる実験現場を見て大変ショックを受けたものの、翌年ポーランドの絶滅収容所へユダヤ人を列車輸送する最高責任者となると、実に忠実に任務をこなすようになりました。敗戦が濃厚になるとユダヤ人虐殺の停止命令が出されましたが、アイヒマンは止めようとしませんでした。

3. アイヒマンの罪

アイヒマンという人、実に几帳面で真面目な人だったようです。移送列車の発着時刻が正確に守られるよう気を配ったり、逮捕された後も部屋や便所をまめに掃除していました。敗戦後アルゼンチンに逃亡していましたが、逮捕されたのは結婚記念日に妻への花束を買っているところでした。

アイヒマン語録には以下のようなものがあります。

「金貨など不要なのだ。ほしいのは命令だ。」
「あの当時は『お前の父親は裏切り者だ』と言われれば、実の父親であっても殺したでしょう。私は当時、命令に忠実に従い、それを忠実に実行することに、何というべきか、精神的な満足感を見出していたのです。命令された内容はなんであれ、です。」

「私の罪は従順だったことだ。」

しかし真面目で従順な人は世の中にたくさんいますし、世の中を支えている人でもありません。よって真面目で従順なことの何が問題だったのか、考えていかなければなりません。

4. アイヒマン実験

大量虐殺行為を犯してしまったのが普通の人だったことに驚いたのはアーレントの他にもいました。ユダヤ系の心理学者ミルグラムは「家族の誕生日に花束を贈るような平凡な愛情を持つ普通の市民であっても、一定の条件下では残虐行為を犯すものなのか」という疑問を抱きました。そしてそのことを実験で確かめようとしました。

実験は以下のようなものでした。

- 新聞広告を通じて「記憶に関する実験」に関する参加者を募集する
- 参加者を「生徒」役と「教師」役に分け、学習における罰の効果測定するものだと説明する
- 参加者は全員「教師」役になり「生徒」役はサクラが担うよう操作する

そしていよいよ実験。「教師」はまず二つの対になる単語リストを読み上げ、今度は単語の一方のみを読み上げ、対応する単語を答えさせます。「生徒」が正解すると次の単語リストに移るものの、「生徒」が間違えると「教師」は「生徒」に電気ショックを流すよう指示を与えます。「教師」と「生徒」は部屋を別々にされ、「生徒」のうめき声のみが部屋に聞こえてくるよう仕掛けを作っておきます。

参加者は良心の呵責を感じて実験続行を拒否し始めます。しかしそこへ白衣を着た権威のある博士らしき男が実験を続行するよう促します。

「迷うことはありません。続けるべきです。」
結果はどうだったでしょう。

何と被験者40人中25人が最大の罰を行使してしまっただけです。

ミルグラムは「普通の平凡な市民が、一定の条件下では、冷酷で非人道的な行為を行う」と結論づけました。

ミルグラムの実験は条件を変えて追試され、「スタンフォード監獄実験」などが行われました。その監獄実験でも囚人役に対する看守役の罰はほとんどエスカレートしていく事象が確認されています。

どうやら役割は人を変えてしまうことがあるらしいのです。

5. アイヒマンと私達

私達も条件が重なったらアイヒマンのような行為を働いてしまうのかもしれない。

一方同じ時代にユダヤ人を救ったシンドラーや杉原千畝のような人もいます。しかしシンドラーとて決して元々人格的に立派なヒューマニストというわけではなかったようです。

何が彼らを分けたのか。さらに掘り下げて考えていきたいです。